目

次

序章　男だらけの現状

男の大学
日本の大学と社会のジェンダー・ギャップ
昨今の大学論
本書のきっかけ
女性学生を排除するサークル
「伝統」と「自治」の名のもとでの女性排除
国際比較と歴史的視点
近年の努力
用語について

11

第一章　東大は男が八割

東大生は男性が八割
男子校の世界

37

海外の大学との比較
東大の教員
教員の状況の国内・国外比較
サークル問題
大学の対応の変化

第二章　女性のいない東大キャンパス——戦前——

『三四郎』と東大キャンパス
東京帝国大学の写真集
三四郎池とモニュメント
キャンパス内の女性像
東大で学んだ女性たち
女性聴講生の存在
女性留学生と大学院生

女性研究者
モニュメントと多様性

第三章　男のための男の大学——戦後——

初の女性東大学部生
当事者の声
名ばかりの共学
東大教員の東大女性論
「女子学生亡国論」
「最高級の花嫁学校」
女性が経験した東大
初の女性教員——中根千枝
女性と学生運動
ゲバ棒とおにぎり

「MAN＝普遍的人間」
男東大
男性中心の系譜
実力主義神話

第四章　アメリカ名門大学の共学化

アイビーリーグ校の共学化
プリンストン大学の共学化
共学化は経営判断
共学の是非をめぐる調査
女性職員の雇用
プリンストンの女性学生
初の女性教授
男性優遇措置の廃止

五〇％に向けて
プリンストンと東大
大学進学率と東大の男女比
東大の男女共同参画

第五章　東大のあるべき姿

日本の大学すべての問題
社会のブレイクスルー
多様性豊かなキャンパスを目指して
クォータ制
クォータ制は「ずるい」のか
女性教員の積極的雇用
女性リーダー増加の必要性
変革を目指して

終章 219
註 226

＊資料の引用は原則として、旧字体を新字体に改め、旧仮名遣いはママとした。
＊本文で言及する組織名・肩書きなどは、基本的に当時のものである。

序章　男だらけの現状

男の大学

東京大学（以下、原則として東京帝国大学など旧称の時代も含めて「東大」と略記）で教えていると、海外から講演や研究会などに来る人を迎えることが多い。その際、よく驚かれることがふたつある。

ひとつは東京都内にこれほど緑豊かなキャンパスがあることだ。本郷（ほんごう）も駒場（こまば）も都心にあるのに、それぞれのキャンパスにはたくさんの木が生い茂り、夏は緑でいっぱいになる。春は桜、秋は銀杏（いちょう）の紅葉が楽しめる。大都会のイメージが強い東京に来て、東大キャンパスの自然に多くの人が感嘆する。

もうひとつはキャンパスに男性の姿が目立つことだ。一、二年生の多い駒場キャンパスの昼休みの時間になると、銀杏並木に学生があふれるが、そのほとんどが男性に見える。実際には女性もいるのだが、男女がほぼ同数の海外の総合大学から来た客人にはあまりに異様に映るのである。本郷キャンパスも教室に入ると男性だらけのことがある。「東大の学生には男性しかいないのか」と真顔で訊（き）かれたこともある。

訪問客を案内してキャンパスを歩くと、あちこちに銅像や胸像があるが、これらもすべ

て男性のものである。本郷キャンパスの広場には葉巻を持ったジョサイア・コンドル像が堂々と立ち、安田講堂の脇には濱尾新の巨大な像が三四郎池を背景に座っている。駒場キャンパスのレストランに入ると、芝生の広がるきれいな前庭にフリードリッヒ・プッチールとジャン・バプティスト・アリヴェというふたりの白人男性の胸像が並んでいる。

一九二八年にアメリカのロックフェラー財団の支援を受けて竣工した本郷の総合図書館は、東大を代表する立派な建物だ。正面玄関を入って左側には「記念室」がある。広々として天井が高く、木目のパネルで壁が覆われている豪華な部屋だ。そこには試験勉強やレポート作成にいそしむ学生を見守るように、インドのノーベル賞作家で男性詩人のラビンドラナート・タゴールの大きな肖像画がかけられている。図書館の三階に行くと今度は閲覧室の入り口にルイ・パスツールとヴィクトル・ユゴーの胸像が並んでいる。大学構内には他にも引退した名誉教授などの像や肖像画などがたくさんあるが、女性のものはひとつもない。

キャンパスには日本を代表する著名な建築家による建物が並んでいて、これを案内するのも面白い。建築愛好家でなくても感激するような作品が、普通に教室やオフィスに使われているからだ。ところがこれらも前川國男、内田祥三、丹下健三、芦原義信、安藤忠雄、

香山壽夫、隈研吾など、男性が設計したものばかりで女性の手によるものはない。

渋谷駅や東京駅から遠くないところにこんなに立派なキャンパスがあるのは素晴らしいのだけれども、「それにしてもずいぶんとマスキュリン（男性的）な大学だね」と皮肉られてしまうこともあり、答えに窮することがある。

日本の大学と社会のジェンダー・ギャップ

本書で繰り返し指摘するように、東大の学部学生の男女比は約八対二、世界の一流大学のなかでも極めて偏っている。

そしてこの状況は日本では東大だけではない。京大は東大と変わらないし、北大、東北大、筑波大、名古屋大、大阪大、神戸大、九州大、一橋大、東京工大などの有名国立大学はどれも現状は女性比率が四〇％に達していない（表1）。日本の国立総合大学は理工系の定員が多く、女子高校生の多くは理系を選択しないのだからやむを得ないという声もある。しかし東大や京大は人文社会系でも女性は半数に達していない。

早稲田大、慶應義塾大、明治大などの多くの有名私大も、一部学部では女性が男性より多くいても、総数としては四〇％程度に過ぎない。文部科学省の学校基本調査（二〇二二

年度）によると、日本の大学における女性学生比率は四五・六％である。女性の方が多いのが一般的になっている欧米諸国などと比べ、この数値でも低いのに、日本のトップクラスの大学の多くはそれよりずいぶんと低いのである。

東大をはじめとする日本の大学の現状は、日本社会全体のジェンダー構造と不可分な関係にある。有名大学の卒業生が大手企業や官公庁に就職し、社会のリーダーとなっていくというのがいまだにキャリアの定番とされるこの社会において、それらの大学に女性の姿

表1　主要な国立大学における学部学生の女性比率

大学名	比率（%）	発表年月
北海道大学	29.1	2023.5
東北大学	26.3	2022.5
筑波大学	38.6	2022.5
東京大学	20.1	2022.5
名古屋大学	31.0	2022.5
京都大学	21.9	2022.5
大阪大学	34.4	2023.5
神戸大学	35.8	2021.5
九州大学	29.7	2023.5
一橋大学	28.2	2022.5
東京工業大	12.9	2022.5

学部学生の女性比率が4割以下の主要私立大学

大学名	比率（%）	発表年月
早稲田大学	38.3	2022.5
慶應義塾大学	36.4	2023.5
明治大学	34.4	2023.5
中央大学	38.6	2023.5
立命館大学	37.6	2022.5

※各大学の統計に基づき作成

が圧倒的に少ないのであれば、女性が社会の第一線で活躍できる可能性はおのずと限られてしまう。

ＷＥＦ（世界経済フォーラム）が毎年出すジェンダー・ギャップ指数で、日本は世界最下位レベル（二〇二三年は一四六ヶ国中一二五位）であることは広く知られているが、大学が今のままであっては、男女の賃金格差の是正や女性の政治家や経営者の増加など、日本が極めて遅れているとされる指標が今後改善される見込みはなかなか持てない。東大が直面する男女間の不均衡は、日本社会の男女平等を考えるために避けて通れない課題でもある。

東大を含めて、日本のトップ大学は、社会の未来のため、キャンパスにおけるジェンダー環境を徹底的に再考する必要がある。それは単に数を合わせるための議論ではなく、あるパーセンテージまで女性が増えれば、それで終わりというものではない。これまでの大学と社会が当然のごとく受け入れてきた男性中心の価値体系を、根本から改める姿勢が求められる。社会と組織に深く染みついた価値観の再考なしに、東大と日本が変わることはできない。

大学は本来、既知の事柄や考えを批判的に再考し、新たな思索を築いていくところである。それが逆に社会の体系的差別の構築と強化に加担しているのであれば、正さなければ

ならない。より公正で平等な社会を築いていくためにも大学を構成する教員、職員、学生ひとりひとりが男女比の歪(ゆが)みに象徴される大学のジェンダー問題を考え、現状の構造の変革に結びつけていかなければならない。それは大学と社会がより多様な声に耳を傾け、すべての人びとの生活を豊かにするインクルーシブな知の体系を築いていくために不可欠な一歩である。男性中心の硬直した社会をあたりまえのものとするのではなく、さまざまな価値観・背景を持つ人びとが集い、交流するなかで新しい、より民主的な発想が生み出される、多面的で開放的なキャンパスと社会を模索する歩みが必要である。

昨今の大学論

東大をはじめとする日本の大学が日本人男性の論理を中心に成立しているという本書の主張には、「なんだ、それだけのことか」という声もあるかもしれない。

とはいえ、日本の大学の現状とその改革の必要性が声高に叫ばれる昨今、高等教育の論者がジェンダーの不均衡と不平等を重要な問題とすることはあまりない。社会における知の創生を牽引(けんいん)する大学のジェンダー環境がこれほどまでに不均衡なのに、それが大学改革の重要事項として盛んに論じられないのは、いささか不思議な欠落ではないだろうか。